

サンプル

全てをなくしても（完全去勢）——前編——

「可愛いな」

「え？」

お風呂の後のアイスクリーム。ソファに並んで座ってテレビを観る。太るよな、と思いつつやめられない休み前夜の至福の時間。

「美味いか」

「はい、食べます？」

カップから一匙掬って掲げてみせる。

「いや、俺はいいよ」

篠崎もシャワーを終えてビールを飲んでる。

知り合った時、バーではいつもウイスキーを飲んでた。しかも珍しいものばかり頼んでいたのがウイスキー通で、それしか飲まないのかと思っていた。けれど一緒に住んでみると他の酒も飲むということが分かった。ウイスキーは好きでこだわるけれど、他の酒についてはそこまでこだわりはないらしい。ビールだって缶のまま飲む。

「美味しいのに」

「見ているだけで美味しいよ」

たまにこういう意味の分からないことがある。恐らく日本語に慣れないのだろう。

「おいで」

篠崎が足の間をぼんぼんと叩いた。そこは安西が二番目に好きな場所だ。

嬉しくなってそそくさと入り込む。後ろからぎゅっとしてもらう瞬間が好きだ。

「ビールは？」

「飲み終わったよ」

「アイスもうちよつとです」

「うん、ゆっくり食べて構わないよ」

足の間に呼ばれるのはセックスの誘いだ。最初はそうとは知らなくて、テレビを観て笑っていたときがある。抱っこしてもらえて嬉しくて、テンションが上がってはしゃいでしまったのだ。中学生でも察するだろうに。

その時篠崎はただぎゅっと抱き締めてくれていた。気持ちがテレビから篠崎に向くのをただじっと待っていてくれたのか、それとも子供だなと思っただけか諦めてくれたのかは分からない。けれどある時ふと誘われているんじゃないかと気付いてテレビを消してみたときの嬉しそうな様子を思い出すと、篠崎の忍耐強さと心の広さには感服するしかない。

「ねえ、一緒に食べましょう」

篠崎は普段自ら甘いものを口にするにはほとんどない。嫌いではないらしいが「身体が必要としていない」かららしい。

「じゃあ食べさせてくれ」

「どうやって？」

分かっているも聞いてしまう。そして堪えきれずつい笑ってしまう。だって篠崎は甘えているふりをし安西を甘やかしているのだ。それが擦ったたい。

篠崎の望む方法で食べさせてほしいなら、それなら——

「……じゃあちゅうして」

「……うん」

篠崎のキスは濃厚だ。啗内の隅々まで丁寧にあされる。最初は息のタイミングが分からなくて焦ったし、舌の長さにも驚いたものだ。けれどこれまでたくさんたくさんしてもらって、そして少しずつ慣れてきた。キスの感触は緊張から、興奮、快感へと変貌を遂げた。

くちゅ、といやらしい唾液の音。少し普段より音が軽いのはアイスクリームが含まれているからだろうか。

「……甘いな」

「美味しいでしょう」

「アイスがない方が美味しい」

アイスクリームの美味しさが分からないなんて、人生損していると思う。でも自分の唇を美味しいと言われて嫌な気持ちになる人なんていない。

「あとちよつと……」

カップの中にはまだ四分の一程アイスクリームが残っている。このまま溶かしてしまうのは勿体ない。特にこれは期間限定のフレーバーなのだ。

「食べさせてあげよう。目を閉じて」

カップとスプーンを取り上げられたので、素直に口を開く。目を閉じる理由は、口移しで食べさせてくれるからだろうと勝手に期待して。なのに。

「んっ?!」

目を閉じて待っていても唇は来なかった。代わりに開けていた口いっぱいアイスクリームを入れられた。

「ああ、勿体ない、垂れているよ」

わざとらしい言葉。驚いて口を閉じてしまったせいで零れ落ちたアイスクリームを篠崎が舐める。こんなことされたら怒るに怒れない。だって、可愛いと思ってしまう。アイスクリームを優先されて拗ねているのかな、なんて。

「んっ……」

キスで熱を持った舌が顎からゆっくりと皮膚を舐め上げる。もうアイスクリームは舐め終えていそうなのに、何度も。

「諒、このままここでいいか」

ソファでの情事は別に初めてではない。構わなかったので、イエスと返した。でもその返答は言葉じゃない。ぎゅっと篠崎の首に腕を回して身体を寄せる、それだけ。

「諒、可愛い」

素直に背中を腕を回せば可愛いと言ってもらえる。篠崎は甘えられるのが好きだ。子供のように甘えれば甘える程可愛いと顔を緩めてくれる。安西は可愛いと言われるのが好きだ。

※ ※ ※

「すみません、今日帰りが遅くなります」

「わかった。気を付けて」

毎朝の日課である玄関での見送り。普段ならキスをねだるように——実際におねだりなのだが——顔を上げるはずの諒は俯いたまま。

「どうした」

「……いえ」

「諒。まだ時間は大丈夫だろう。言っごらん」

何かに引っかかっている様子だ。しかし育った環境のせいなのか、諒は言いたいことを我慢してしまふことが多々ある。そんなときはこちらから言えるようにしてあげなければならない。

「諒くん」

引き寄せて抱きしめ、言ってもいいのだと思わせる。

「……ごめんさい」

突然の謝罪。一体どうしたというのか。ざっと今朝の様子を思い出しても特に謝罪を必要とするようなことはなかったよう思う。しかし繊細な諒はこちらが気にしないようなことでも気に病んでしまうことがあった。

「お話しできるかな」

「こういうときは子供に接するように。」

「……僕……」

「うん」

頭を撫でる。急かすことはしない。諒の首に回した腕。こっそり時計を確認する。まだ大丈夫だ。最悪送ってあげばいい。そうすれば会社の前で下ろすことで駐車場の時間や駐車場から会社までの時間を短縮できるだろう。数分だけだ。

「……僕、身体、他の人に見せているんです」

謝罪の理由は何も想像がついていなかった。けれどまさか、そんなことを言うとは。まさか浮気をしているとは思っていないが、どうということなのか。理由が何であろうと、この身体を他人が見ていると思うと一瞬で身体が熱くなる。

「どうということだ」

自分で思っていたよりも低い声が出た。腕の中の諒がびくりと震える。

「……ごめんなさい、その……」

「……欠勤の連絡をしなさい」

「や……」

諒がいよいよと首を振る。けれど許せるはずがない。

「誰に、どうして身体を？金でも必要なのか」

金ならば言えばいくらでもやった。本当ならば仕事も辞めさせて家に居させたいと思う気持ちを堪えて出勤を許しているというのに。

「ちがっ！……あの、毛を……」

「……け？」

けとは何だろう。

「毛です、その、脱毛を……」

脱毛。それなら分かる。しかし突然どうしたのだろう。

「……あ、あそのこの毛を、脱毛したくて、その、サロンに通ってて、だから……」

合点した。施術でスタッフに身体を見られているということだ。しかしどうして急に脱毛なんて考え始めたのが分からない。

「……脱毛をしたかったのか」

「……はい」

諒は小さな声で何度もごめんなさいごめんなさいと繰り返した。

セックスのときの身体を思い出す。以前から剃ってやることはあったがそれは羞恥プレイやエイジプレイの一環だった。でも確かに最近には剃ることもなかったし、生え始めのちくちくする感じもなかった。剃られるのが恥ずかしくて(何度もしているというのに未だに諒は羞恥で泣くこともあった)自分で処理しているのかと思っていたが。

「そうか。……しかし色々話を聞かないとな。休みなさい」

「……はい」

諒の身体を放し、踵を返す。後ろから「もしもし……」と頼りなげな声が聞こえた。

寝室のベッドに座り、身体をドアに向けて欠勤の連絡を終えた諒を待つ。俯いて入室した諒を目の前に立たせ、一枚ずつ脱ぐように指示をした。そして全てを脱ぎ終えても、座らせることはしない。身体を手で隠すことも許さない。ただ静かに曝された陰部をじっと見る。未熟なペニスと萎えたまま、皮で隠れてしまっている。

「ツルツルの恥ずかしいお股にしたかったんだよな」と諒の喜ぶ言葉を使って優しく言うこともできた。けれど、聞いてもないことを突然カミングアウトしたり謝罪をするという諒のそれは「お仕置きをされたい」という願望でもあるのだ。自分の心で抱える限界で暴露し、お仕置きをされることで楽になりたい・許されたいという願望。

本当にいけないことをすればお仕置きをせず距離を置くことが一番効くのだろうけれど、今はまだ甘やかして心の重心をこちらに傾けさせる必要があった。

「諒」

「はい……」

「四つん這いになりなさい」

「……はい」

諒が床に這い蹲る。しかし、それではいけない。

「諒。顔はこちらじゃない。どこを見るために言ったのかはもう分かるだろう」

「ごめんなさい」

諒が身体の向きを変えた。恥ずかしい場所がこちらに向く。

「自分で尻を開きなさい。会陰まできちんと見えるように」

「はい……見てください」

頭で身体を支え、両手が尻に回る。そして開かれる秘境。

「ああ、よく見えるよ。お尻の毛をきれいにしてもらうときもそう言ってお願いをしたのか」

「……いえ」

「本当に？」

「施術のときは礼儀としてお願いしますと仰いました」

「そうか」

普段からスーパーやコンビニのレジでも諒は礼儀正しくお願いします、ありがとうございますと仰う。そういうところも気に入っていたのだけれど、陰部を差し出しながらの挨拶は意味が違う。

「施術をしたのは女か男か」

「男性です」

「アナルやおちんちんには触れられたか」

「施術なのだから触れられることは当然だ。けれど敢えて訊く。これはお仕置きであり羨なのだ。」

「はい……」

「どうして」

「毛をきれいにしてもらうためです。おちんちんの根元の毛をなくすときや、おちんちんが邪魔なときに

おちんちんに触れられました」

「アナルは」

「お尻の割れ目をきれいにしてもらうときに触れられました」

「指は入れられたのか」

「いえ、施術のために触れただけです」

「タマは？」

「……タマタマも、毛をきれいにしてもらうために触られました」

「感じたのか」

「感じていません」

「勃起していませんか？」

「していません」

「施術を思い出してオナニーしたことは」

「ありません」

「思い出してドキドキしたことは」

「ありません」

「どうして今日言った」

「……今日、仕事帰りに施術の予約があつて……けれど黙っているのが辛くて」

「どうして最初に相談しなかった」

「……恥ずかしくて、その、きれいになったのを見てほしくて」

「恐らくこれはきつと女が脱毛サロン通いを男に言わないのと同じ心理だろう。そしてきつともうすぐ終

わるから言ったのだ。」

「どうしてきれいにしたかったんだ」

「……しのぎに可愛いつて言われたかつたんです」

「諒の声に甘えが混じってきた。感じている。四つん這いそのままなので見えないけれどきつともうペニス

も反応してきているだろう。」

「諒、立ちなさい」

「はい」

立ち上がり、身体がこちらに向く。ああ、額が赤くなつてしまつてゐる。

しかし今はまだ甘やかす時間ではない。視線を下げる。ペニスはやはり反応していた。

「おちんちんが起つているが、施術を思い出して勃起しているんじゃないのか」

「違います。篠崎に恥ずかしいところを見てもらつたからです」

「恥ずかしいところ？どこかな」

「おちんちんと、お尻とタマタマです」

「そうか、そこが諒の恥ずかしいところなんだな」

「はい」

「その恥ずかしいところを他人に勝手に見せて……」

「ごめんなさい……」

「諒のここは」

「言いながら指先でつんと小さな勃起を突く。」

「っ……」

「誰のだったかな」

「……篠崎の、です……」

「そうだ。俺の。勝手に人に見せてもいいのかな」

「だめです……」

「声が震えている。泣きそうなのだろう。」

「……おいで」

引き寄せて、膝の上に対面で座らせる。

もしかしたら陰毛がなくなっていることに気付かなかったのが悲しかったのかもしれない。気付いてやれなかった。しかし、それだけで許すことはできない。気付けなかった非があっても、そもそも内緒でそこを他人に見せていたのだ。事前に言われていれば羞恥プレイの一つとして許可をしたのに。

「しのぎきつ……」

「きちんと言えていいこだった。でもまだ許したわけじゃない」

「はいっ……」

もう、泣いていた。抱きしめたことで決壊したのだろう。諒の目が肩にぐりぐりと押し付けられる。

「今日は恥ずかしいところをたくさん虐めるよ。射精させるかも分からない。けれど、きちんと夜にはサロンに行きなさい。恥ずかしいところが腫れていても、だ」

「はいっ……」

許して欲しくて必死なのだろう。何度も何度も頷くように頭が動いていた。

~~~~~

「上手だ……犬の次はどんな動物に抱いてもらうんだろうな」

「やだあああ……!」

いや、と言いながら、きちんとそこは大きなデイルドを少しずつだが飲み込んでいく。くちゅ、という水音がイヤらしい。

「ほら、美味しそうに食べてるよ」

「やだああ!」

亀頭部分が内部に取り込まれた。これから陰茎は徐々に太くなっていく。

「あつ、うそっ」

「ああ、諒は大きいおちんちんが好きだろう」

「うっ、馬っ!馬?うま!」

「ああ、正解だ。お尻の中が敏感なんだな。形が分かるなんて優秀だ」

「うううう……」

しくしく、ぐずぐずと諒は泣き続けている。けれどもうその小さなペニスも起ち上がっていた。

「馬のおちんちんが好きなのかな。勃起しているよ」

「やああっ!違うッ」

「違わないよ。小さなおちんちんが一生懸命硬くなってる」

「やああ!」

正解したのだから抜いてやってもいいのだが、勃起にイラつきデイルドを更に押し込んだ。

「ああああああ!」

「ほら、馬の大きなおちんちんの味はどうかな」

「やだああ……やです……篠崎のおちんちんがいいです……」

いやだと泣きながらも微動だにしない様子がとてもイヤらしい。少しでも動けば乳頭が伸びて痛いのだらう。

「だがおちんちんは気持ちいいと勃起しているよ」

「やあっ」

言葉で虐める度に小さなそれはびくびく揺れている。素直な陰茎はとても愛らしい。

「馬の大きなおちんちんは嫌かな」

「いやっ、嫌です……」

「じゃあ、もういいこになれた?お仕置きをいやいやと言うのはいいこなのかな」

「ごめんなさいっ、ごめっ」

「うん、じゃあ、あと一つ、頑張ろうか」

「うう……やあ……」

「俺以外に勃起を見せちゃう、いやらしいこのままでいいのかな」

「やだあ、やですっ、おちんちん勃起見られたくないっ」

普段ならぐずぐず泣くときは子供のように手で目をごしごし擦るのに、今は拘束具のせいでそのままだ。目隠しのせいで涙に濡れる瞳も見えない。少し物足りないけれど、これはこれでとてもいい。

「ほら、お馬さんの遊びは終わりだよ。大きいからいきみなさい」

「うう……」

お腹に力が入ったのを確認してデイルドに手を添える。手を使わずに内部の物を吐き出すのは慣れてい  
るので、デイルドの重さを支えてやるだけでいい。

「なかなか出てこないな。やはり大きなおちんちんを抜きたくないのか」

「ちがっ、やだあっ！大きくて出ないッ」

「大丈夫、出せるよ。うんちだと思って思い切りいきみなさい」

「んんん」

ぐちゅ、というローションの音と共にぶふつと空気の抜ける音が響いた。

「やああ！いっ！痛いっ！」

空気が抜けるのはやはり恥ずかしかったらしい。身をよじった途端に悲鳴が上がった。

「おっぱい取れちやうっ」

「取れないよ。ほら、お腹に力を入れなさい」

「んんん」

再びぶふつとはしたくない音がする。しかし人間の構造上それは仕方のないことだ。それよりむしろこ  
んなに大きなデイルドを入れていても空気が抜ける隙間があるということに驚く。そのうちファストに挑戦  
してみてもいいかもしれない。

「やっ」

「諒、気にとることじゃない。それより早く出しなさい」

「はいっ……んっ、んんっ」

ずる、と少しずつつデイルドが見えてくる。諒の普段は慎ましく閉じたアナルから馬のペニスが出てくる  
姿は言葉にならないほど妖艶だった。撮影していなかったことを後悔する。——とそこで気付いた。諒は  
目隠しをしていて何も見えていないのだから撮影しても構わないだろう。

ポケットから取り出した携帯の無音カメラを起動し、アップでアナルを映す。赤く腫れたアナル。伸び  
きった皺がいやらしい。

「んんっ……」

ずるずると少しずつではあるけれどデイルドは抜けていく。それが黒色のせいで、どうしても排泄を思  
い起こしてしまう。今のところ大便の排泄を見たことはない。それもやはり見たいと思う。トイレでの排  
泄ではいけない。やはりこうした体位で排泄を観察したい。排泄後のファストもいい。洗浄はさせず、  
医療用のゴム手袋でもすれば中の粘膜の感触も楽しめるだろう。行為のあとに汚れた手袋を見せつけるの  
もいい。

「あっ、あっ、しの、しのざきっ」

「うん、全部出るな」

長いデイルドは元々半分程しか入れていなかった。それがずるんとシートに落ちる。

「あ……ああ……でたあ……」

まるで排泄を終えたようなセリフにペニスが疼く。

「中が緩くなってしまったかな」

「っ、や……」

「今入れても緩くていけないかもしれない」

「やっ、やだ、やですっ、ぎゅってするから、お尻に力を入れるからっ」

「ああ……そうだな、じゃあ頑張って次の相手も見極めてくれ」

最後はピンク色をしたカモのペニスだ。螺旋状のもの。押し込むだけでは入りそうにないので、振じる  
ように回しながら入れるしかないだろう。

「ほら、いきみなさい」

「んっ」

恐らく話の流れから篠崎のペニスをもらえるところで思っているのだろう。素直にいきむ様子が可愛い。

その膨らんだアナルに小さく細いそれを宛がう。

「えっ?!」

「ほら、おちんちんだよ」

「やっ、ちがっ、篠崎のっ」

「まだだめだ。まだいいこになれていないだろう」

~~~~~

「あの、篠崎、食事を終えたら相談したいことがあるんですが」

そう諒が切り出したのは篠崎がテーブルについてすぐのことだった。何やら深刻な様子。何かあったの  
だろうかと心配になる。

「先に聞こう」

「あ、いえ、食べてからでいいんです……もしかしたら、食欲なくなっちゃうかもしれないので……」

食欲がなくなるかもしれない相談とは一体何のことだろう。様子から別れ話ではないことは分かる。無  
理矢理聞き出すこともできるが、セックスのとき以外ではあまり虐めたくない。

「じゃあ温かいうちにいただこう」

手を合わせてフォークを持たせ、諒はほっとしたように笑った。

「コーヒーは俺が淹れるよ」

食器を洗い終えた諒の背中を押し、ソファに座らせる。少し顔が強張っていたので慰めるように頭を撫  
でてからキッチンに向かった。

「それで？」

コーヒーを飲みながら問う。諒はなかなか口を開こうとしない。緊張しているのだ。気になるところだ  
が少しそっとしておいた方がいいかと無言のままマグを口に運ぶ。

諒が口を開いたのはコーヒーが半分減った頃だった。

「あの……」

「うん」

「あの、手術をしたいんです……」

「病気が見つかったのか？」

まさか。全く気が付かなかった。急いで頭を回転させて最近の諒の様子を思い出す。しかし苦しそうに  
する様子や寝込んでいる姿は思い浮かばない。必死に隠していたのだろうか。恐怖心を押し隠して。どう  
して気付いてやれなかったのだろう。

「いえ、違うんです」

「違う？」

病気ではないというのか。それなら何を手術するというのか。整形手術？いや必要ない。そのまま十  
分魅力的だ。

「あの……タマタマをなくしたいんです……」

言葉も失った。諒はそういうセクシャリティだったのだろうか。それなら今までひどい苦痛を与えてい  
たことになる。「おちんちん」「タマタマ」「エッチなアナルまんこ」そうやって「男である」という言葉  
使ってきた。全く気付かなかった。そういう言葉の責めにも喜んでるように見えていたが、そうでな  
かったなら――

「すまなかつた。気が付かなかった」

「え？」

「諒は女の子になりたかったのか」

いや、違う、失礼な言い方をしてしまった、と急いで言い直す。

「諒は女の子だったのかな」

「あ……」

言い直したこの意味に気付いたようだった。少しだけ顔を赤く染めている。

「あの……」

「うん」

一向に口を付けようとしなないマグを取り上げ、自分の分と一緒にテーブルに置く。それから肩を抱き寄  
せる。大丈夫、君がどんなことを望んでも一緒にいるから、と伝えたくて。

「僕、は……男、です……男だけど……篠崎のメスになりたいんです……」

一度では理解できず、頭の中で反芻する。まず、諒は男だ。つまり、性同一性障害ではないということ  
だろう。しかし、篠崎のメスになりたいという。それはどういうことなのか。今のように彼氏ではだめな  
のか。

「諒は今のままでも十分可愛くて魅力的なんだが、それでは足りないのかな」

「……はい。タマタマなくして、篠崎だけのメスになりたいんです……」

「……わかった。しかし、少し時間をくれ。いろいろ調べてみたい。手術の方法や、リスクを」

「わかりました」

諒は少しほっとしたようだった。長いこと一人で悩んできたのかもしれない。

本当は手術などさせたくはない。綺麗な身体に傷をつけるなんて。いや、傷があっても諒は綺麗だが、それでも不用意な痛みは与えたくなかった。しかし、本人が望んでいるのだ。どんな姿であれ、愛しているということを伝えなければ。

「パソコンを持つてくるよ」

頭を一撫でして席を立つ。書斎にあるノートパソコンを取り、再び諒の隣に座った。

「ああ、ええと、いわゆる玉抜き、でいいのか」

そのフリーズなら何かで聞いたことがあった。テレビだったか、酒の席だったか。

「あ、違うんです……」

「違う？」

部下だったら「最初からはつきり言え」と叱り飛ばしている。けれど相手は愛する恋人だ。言いにくいこともあるのはわかる。

「何かな、言えるかな」

子供扱いをすれば素直になる特性を利用して促した。

「あの……辜丸除去じゃなくて、陰囊切除なんです……」

何が違うんだ。一体何が。同じじゃないのか。ストレートにそう聞いてしまいたいが、ぐっと抑える。せつかく勇気を出して話してくれたのだから怯えさせたくない。

「違いがあるのか」

「えと……辜丸除去だと、袋が残るんです。けど、僕は何もないようにしたいので……」

つまり辜丸除去は袋の中の、まさに子作りに必要な部分のみを取るということで、陰囊切除はそれこそ袋ごとばつさり取ってしまう、ということなのだろう。

「つるつるのお股にしたい？」

「……はい……」

「おちんちんは？」

「おちんちんも……」

「なくしたい？」

諒は少し、性的興奮をした様子で頷いた。

~~~~~

退院日の夜、シャワーを浴びる許可は得ていたので浴びることにした。でも患部は濡らさないようにと言われていたので、どうしたらいいか分からず篠崎に任せてしまった。

「まだ見るのは怖いか」

「はい……」

元々グロイのは苦手だった。かさぶたを見るのだって苦手だ。けれど篠崎はどうやら平気なようで、午後の消毒のときも嫌な顔一つせずガーゼを剥がして丁寧に消毒をしてくれた。

「わかった。濡れてはいけないからタオルを挟んでおこう。足で挟めるか？」

「……怖いです」

股間にオムツのようにはかけられたタオル。挟めば確かにずり落ちたりはしないが、患部に力を入れて物を挟む、ということが怖かった。

「うん、そうだな。大丈夫、動かなければ落ちないよ」

マットの敷かれた床に寝転がり、頭の下に畳んだタオルを置いてもらう。

「髪から洗おうな」

まるで介護だ。けれどぬるめのお湯も、優しい手付きも気持ちがいい。頭皮をマッサージされると眠くなってしまう。

「眠っていて構わないよ」

「や……」

自分の身体を人に洗わせておいて寝るなんてできない。閉じそうになる瞼を懸命にこじ開ける。

「諒。大丈夫、眠りなさい」

篠崎がそういうのなら、まあいいか。そう思っただけでゆっくりと落ちる瞼から力を抜いた。

そうは言っても、背中を洗うときには起きる必要があった。それでも最後に回してくれたらしく「背中を洗って流したら終わりだよ」と優しく言われた。まだ平らなところに座ることができないので、篠崎の



胡坐の上に横向きに座る。少し足をM字に開いて患部が触れないようにした。

「気持ちいいな」

「うん、気持ちいい……さっぱりします」

泡を流してもらって、身体を拭いてもらう。ベッドで消毒の後にガーゼをしてもらって、着替えもさせてもらって、寝ころんだまま髪の毛も乾かしてもらおう。自分でしたのは頭の向きを変えるために右から左へと身体を転がしただけだ。篠崎は本当にマメで、甘やかすのがうまい。

「シャワーを浴びてくるよ。寝ていて構わない」

「ありがとうございます」

まだ患部はじくじくと痛んでいる。ネットでは二か月くらい痛かったと書いてあったから先が長い。陰茎切除までしていたら、こんなものじゃなかっただろう。

陰茎切除——したらどうなるのだろうか。とにかく痛そうだ。でも……やはりしたい。

篠崎が手の届く範囲に置いておいてくれたタブレットを取り、寝転んだまま操作する。

【陰茎切除】

検索すると、医療系の報告書が出た。「自己陰茎切断症」の文字。しかし内容を見ると、どうやら自傷行為のように自分自身の手で切断しようとするものようだ。さすがにそんなことは怖くてできない。安西は画面を戻した。

画面をスクロールしていくと、やはり少数ではあるようだが男性器をなくしたいと思っている男性はいるようだった。自分だけじゃないということに少しだけほっとする。

でも、どうしてこんなにいらなのだろう。なくしたいと思うのだろうか。ペニスでの快感は知っている。とても気持ちがいいし、篠崎とのセックスは幸せな気持ちになる。多分、だからこそ、なのだ。自分はきつと、世界でも稀なMなのだろう。気持ちいいのを知っているからこそ永遠に奪われてしまいたいのだ。無理矢理去勢されて、絶望で泣く男のエロ画像を見て興奮できるのだ。うらやましいと思うのだ。

——篠崎が無理矢理、それこそ安西が寝ている間に麻酔でもして、手術をさせてくれないだろうか。目が覚めたらペニスがなくなっている——それってすごくいい。

想像しただけでまたペニスが勃起してしまった。冷蔵庫まで、とてもじゃないが一人では行けそうにない。

ああ、でもこれも我慢なのだ。触れてもいいけない。射精もできない。篠崎がシャワーを終えるまで、勃起させたまま悶々と我慢をする。そしてようやく篠崎が来て、そして冷たいタオルで冷やされる——ああ、最高だ。

「諒」

「あ……しのぎき……」

いつ戻ってきたのだろう。気付かなかった。

「どうした、とろんとしてるな」

髪を拭きながら篠崎がベッドに座る。

「うん……いろいろ想像したらおちんちんまた勃起しちゃって……」

「……今も勃起したままなのか」

「はい……おちんちん勃起したまま我慢していました」

「我慢は辛いかな」

「辛いです……早く楽になりたいです」

「楽に、とは？」

「……萎えさせたいです……萎えさせてほしいです」

「きちんと言えたな。ご褒美に、もう少し我慢をしようか」

「やああっ！」

ご褒美が我慢なんて。——すごく好きだ。こうやって、虐めてくれるときの篠崎が。

「何を想像したんだ」

「……僕が寝ている間に、手術しておちんちんなくして欲しいなって……」

「ほう……」

「起きたらおちんちんがなくて、絶望で泣きわめきたいんです……」

「だが、諒くんはすでにおちんちんをなくしたいと思っているだろう？寝ている間に切り落とされてしまったって絶望はしないんじゃないか」

「あ……そう……ですね……」

「……諒、身体が落ち着いたら沢山おちんちんを可愛がってやろう。いらなんなんて言われて可哀想なおちんちんを沢山慰めて、諒がおちんちんあってよかったと思えるようにしたい」

「……はい……」

子供にしてみたいに額にキスをされて、布団を掛け直された。

「先に寝ていなさい。髪を乾かしてくる」

「……おちんちん……」

下腹部は解放を求めて脈打っている。

「明日の朝まで勃起したまま我慢しなさい」

「はい……おやすみなさい」

目を閉じる。なんとか寝ようとする。だって、篠崎が寝なさいと言ったから。おちんちんは苦しいけれど、明日の朝まで我慢と言われたから。おちんちんなくさなくて良かった、と少しだけ思った。

前編約五万一千文字あります。

前編後編合わせてのざっくりした内容は

陰囊切除、ピアッシング、包茎手術、射精管理、剃毛(永久脱毛)、女体化、口オナホ

包茎手術・陰茎切除・腸内洗浄・性器ピアッシング(ピアスに鈴・リード)・オナホール・セクシーランジ

エリー等(順不同)な感じです。

※後編未完成です。完成まであとちょっとなので、→から増えることはあっても減ることはないです。

宜しくお願い致します。